引　用　文　献

杉島敬志編．2014.『複ゲーム状況の人類学―東南アジアにおける構想と実践』風響社.

木村大治．2018.『見知らぬものと出会う―ファースト・コンタクトの相互行為論』東京大学出版会.

蛯原一平・齋藤暖生・生方史数編.『森林と文化―森とともに生きる民俗知のゆくえ』（森林科学シリーズ 12）共立出版，2019 年，288 p.

大石高典 *

本書は，高校生，学部学生から専門教育への導入レベルまでを射程に入れた教科書『森林科学シリーズ』の一巻として編まれている．やや型破りにも，執筆陣のほとんどが文化人類学と環境社会学の研究者で占められている．分野を超えて森林と人間の関係について考える挑戦的な教科書の刊行は，自然科学的な視点から森林に関心をもつことが多いであろう農学系の学生や若手研究者に，より複眼的に森林について見つめ直すきっかけを作ったというだけでも意義があると思われる．

内容を見ていこう．全体の導入である第 1 章（蛯原一平・齋藤暖生・生方史数「森とともに生きる人々の文化と民俗知」）は，森林文化を「地域の人々が世代を超え培ってきた，森林をめぐる多岐にわたる知識やそれらを利用する技術・技能，さらには森への畏怖や世界観，そして行動実践の総体」（p. 2）と定義づける．そのうえで本書を通じた鍵概念，「民俗知」への導入が「科学知」と比較しながらなされる．高度に形式化され普遍化が志向される科学知に比べて，土着的に形成される民俗知は記号化による表象は困難だが，暗黙知のように「共通体験を通して感覚的に伝えることが可能な知識」（p. 5）を含む点に特徴がある．民俗知は科学知を補い，持続的な資源管理にも役立つが，科学知に対し従属的な立場に置かれがちである．このことは，森林に関わる地域住民の周辺化と関わっている．民俗知をより適正に評価したうえで，資源管理や保全の制度に組み込むことが社会的公正に適うことであり，そのための課題を整理することが本書の目的のひとつとして提示される．

第 1 部「民俗知を知る：熱帯と冷帯に暮らす森の民の事例から」では，アフリカ（第 2 章），東南アジア島嶼部（第 3 章，第 4 章），北アメリカ（第 5 章）と地域をまたいで事例研究が集められている．

第 2 章「民俗知と科学知：カメルーンの狩猟採集民バカの民俗知はどのように語られてきたか」（服部志帆）では，エスノサイエンスの研究史が概説された後，バカの植物知識が第 3 章に登場するプナンとの比較を交えて描き出される．熱帯林に暮らす狩猟採集民でも，バカとプナンで民俗知の特徴はだいぶ異なる．バカの植物知識で数が多いのは薬用利用だが個人差が大きい．服部は，そこに個人の病歴や試行錯誤が凝縮されているとみる．バカの民俗知は，絶えず構築・更新される「なまもの」である．近年，開発と自然保護の板挟みでバカの生活変容は著しい．先住民運動の文脈で民俗知が政治化される状況や

* 東京外国語大学

非木材生産物の商品化に向けた協働の可能性について触れられる．

第 3 章「森林環境問題と住民の森林観：なぜプナンは森林を守るのか」（小泉都）は，激しい開発にさらされ森林へのアクセスを奪われてきたプナンの対応に焦点を当てる．開発には，政府，企業，地域住民の利害が錯綜した政治力学が絡み合う．プナンの応答は多様だが，NGO からの支援を得て森林を守り抜いた集団がいる．彼らが森林伐採に反対する理由は，森林から得られる食料や現金収入のためだけではない．「プナンの生き方は森林への信頼に根差して」（p. 75）おり，実存に関わる動機付けがある．抵抗が機能した要因として近隣の農耕民との民族間関係の重要性が指摘される．

異なる価値観がぶつかり合う熱帯林について，多様な利害関係者が管理の意志決定に加わる「協働管理」の仕組みが模索されている．第 4 章「熱帯林ガバナンスの「進展」と民俗知」（笹岡正俊）は，インドネシアにおける取り組みを検証する．国立公園近傍に暮らすセラム島山地民は，超自然的存在による監視という独自の方法で「クスクスを捕り，猟場を自ら管理」（p. 102）してきたが，公園管理計画の決定過程から排除されているために猟を継続できる見込みは立っていない．協働管理の理念が制度設計に落とし込まれても，実際の運用に住民が参加できなければ，民俗知がすくい上げられる余地はない．では，研究者に何ができるか？笹岡は，民俗知の中でも深い地域理解を要する暗黙知の領域について，全体性を損なわずに丹念に拾い上げ「表に出すこと」だという．

第 5 章「近代化と知識変容：カナダ先住民の「知識」をめぐる議論と実践」（山口未花子）では，北方針葉樹林に暮らすカスカの民俗知が，外部社会との関わりの中でどう変化してきたのかに焦点を当てる．カスカがブッシュと呼ぶ森についての知識は全体性をもち，具体的空間に宿る超越的なものを含む．狩猟活動は，動物や動物の霊と信頼関係を築くことで成立する．しかし，定住化政策や過去に行なわれた同化政策のため，現在では民俗知の担い手は高齢者に限られる．自治政府は知識伝承のための機会を作っているが，若者の参加は積極的とはいえない．山口は，古老から受け継いだ伝統的知識を継承する担い手になろうとしている．

第 2 部「民俗知をつなぐ：国内山村の事例から」では現代日本の山村における森林利用と民俗知が扱われる．

山村の森林利用は古くから市場経済に組み込まれてきた．第 6 章「和紙原料栽培の民俗知から見る新たな森林像」（田中求）では，高知県山間部における和紙原料（コウゾとミツマタ）の栽培・加工の歴史と民俗知が紹介される．和紙原料は他の作物と混作することで生育に相乗効果が得られる．ミツマタは，かつて焼畑で食用作物と一緒に栽培されていた．手間がかかる収穫と加工は，地域社会の楽しみでもあった．民俗知と地域社会の相互扶助のつながりに支えられた和紙原料栽培は，まさに森林農業（アグロフォレストリー）というべきものだったことが分かる．しかし，その営みは和紙の需要減やコウゾの輸入自由化などにより衰退しつ

つある．

第7章「山を知る：森とともに生きるマタギたちの民俗知」（蛯原一平）は，「山」を知悉する猟師の民俗知を「生き方」として把握する．猟師たちは，山の地形や景観について自らの経験に基づく極めて具体的な知識（記憶知識）を蓄積し，仲間と共有することで猟を成り立たせている．春熊猟に関する事例記述は，著者自身が長期の参与観察を重ねる中で，記憶知識を身に付けてきた過程を彷彿とさせる民族誌になっている．

第8章「ありふれた資源をめぐる民俗知：山菜・キノコをめぐる民俗知とその現代的意義」（齋藤暖生）は，岩手県の山村を事例に採集・利用過程における民俗知を紹介する．山菜・キノコ利用は，生活に必須ではないが代え難い楽しみをもたらす．採集対象の発生には気候など予測不可能な要素が多く，確実に収穫するには生息地や時期について個別で具体的な生態知が求められる．採集には生態知に加えて社会知も重要である．調査地で山菜・キノコは自由にアクセスできる資源だが，それ故に採集者による自制の規範が生まれる．希少性はないが強く嗜好される山菜・キノコは，「ごちそう」として地域で分かち合われてきた．齋藤は，山菜・キノコ利用文化を観光や特産化に活かす取り組みに関わり，在来知を活かした地域振興の可能性をともに探っている．

国内でも国立公園や世界遺産といった保護地域制度を活用した地域振興が盛んに行なわれてきた．第9章「保護地域を活用した地域振興や山村文化保全の可能性」（柴崎茂光）では，エコツーリズム，日本遺産，文化財保護法改正を事例に保護地域制度の適用と帰結が検討される．保護地域に指定されると，保護されるべき「主要な価値」ばかり追及することで「価値の単純化」が起こりやすくなる．観光化のため外部者に価値を分かりやすくすることが求められるが，これも価値の切り捨てを促進する．補助金に代表される外部からの半強制的なインセンティブによる保護地域指定の取り組みは，結果的に民俗知の消失につながりかねない．

最後の第10章「民俗知のゆくえと現代社会」（齋藤暖生・蛯原一平・生方史数）では，本書全体の結論が述べられる．人と森林を結び付ける役割を果たしている民俗知は，「身体に内在する知」であり，人々の生活や置かれた状況とともに常に変化し続ける．民俗知は，科学知と交流・補完し合うことで，資源管理，環境保全，地域振興に貢献することが期待されるようになってきているが，民俗知の安易な活用にはその全体性を考慮しない「切り取り」や「価値の単純化」の罠が潜む．これらのリスクを減らすためには，地域と外部社会との間で民俗知を適正かつ柔軟に媒介し「翻訳」する存在が重要となる．

以上が本書の概要である．ここからは評者の若干のコメントを付す．

まず，森林と人間の関係を考える切り口として，民俗知という具体的な分析枠組みを設定し，国内と海外の事例をあえて同じ地平に置いて議論を試みた点を評価したい．グローバルな動きとローカルな生活世界のリアリティの両方を視野に入れながら，森林と人間

の関係を学ぶことができるようになっている．通読すれば，開発・自然保護や過疎化といった社会課題に直面する森林地域の住民が抱える葛藤が重なり合いながら浮かび上がってくる．このことは，外部からの影響を受けつつも，それぞれの地域社会の中で「森林とともに生きること」と深く結び付いた内在的な論理・仕組みであったはずの民俗知が，国家・ドミナント社会・企業・NGO などの外部アクターとの交渉の中で政治化される場面が増えていることにも現れている．

それ故に，評者には本書の最後に言及されている民俗知の「翻訳」が，矛盾をはらんだ困難な仕事に思える．編者のひとりである蛯原をはじめ，現地に長期間住み込みながら研究を続けるレジデント研究者が複数執筆陣に加わっていることが本書の特徴であり，地域社会や知識の担い手とともに研究・実践する方向性が強く打ち出されていることはよく分かる．しかし民俗知とは，身をもって識るものではあっても，翻訳可能なものなのだろうか．本書の中で繰り返し示されているように，一見とらえどころのない，不定形なところが民俗知の良さであり特徴である．エスノサイエンスの記述・分析と，地域社会のサバイバルに関わる知識の翻訳（権利擁護や代弁）とでは目的も意味も異なる．「民俗知を可能な限りで形式知に変換してから，他者に伝える」（p. 278）ことが媒介・翻訳なのだとすると，翻訳者は，柔軟で可塑性のある民俗知が形式に馴染まないことを了解したうえで，民俗知が形式知に絡め取られ固定化されてしまわないような「翻訳」のあり方を試行錯誤するという困難を強いられることになる．「複数のアイデンティティや立場を有する人材」（p. 279）であるほど，その苦悩は深くなるのではないだろうか．

それでもあえて翻訳という言葉を使うのならば，評者は民俗知と科学知の二項対立を前提とする「知の変換」よりも，本来の翻訳仕事に含まれる異種混交による創造や遊びの創出過程に着目したい．現代のレジデント研究者には，必要に応じて外部社会を巻き込み，民俗知／科学知を問わず活用しながら新たな知識を地域の人々と「ともに」創造していく，コンヴィヴィアルな営みこそが求められているように思うからである．

間永次郎．『ガーンディーの性とナショナリズム―「真理の実験」としての独立運動』東京大学出版会，2019 年，390 p.

藤倉達郎 *

非暴力主義によってインド独立運動を率い，マハートマー〔偉大なる魂〕と呼ばれたガーンディーは，インドとパーキスターンの分離独立を目前に控えた政治的大混乱の時期に，自らが出版していた週刊誌に「ブラフマチャリヤ」（性欲統制）に関する記事を連載する．5 回シリーズで掲載されたその記事は，インドの人々に「生殖器官の統制」を行ない，「真のブラフマチャーリー」（性欲統制者）になることによって「独立（スワラージャー）の全ての任務」を完了するように説いた（pp. 3–4）．ま

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科